



## 日本語と日本文化のはざままで…

株式会社ジャパントイムズ 代表取締役社長  
The Japan Times PRESIDENT

**小笠原 有輝子氏**  
YUKIKO OGASAWARA

### Profile

日本生まれ、米国で幼少期を過ごす。エバーグリーン州立大学文学士、カリフォルニア美術工芸大学美術学修士号取得。

フランスコ中学校美術教師、様々な活動を通じて子供たちへの美術指導。

最近ではNGOチルドレン・エクスプレス(子供達がジャーナリズム活動や美術を通して自分の意見を表現することが活動目的)の理事に就任。

2003年、日本に戻り(株)ニフコ国際部事業副本部長、2005年同社取締役、2006年ジャパントイムズ代表取締役社長就任、2008年ニフコ常務執行役員に就任

**池崎** 日本にお戻りになったのはいつでいらっしゃいますか？

**小笠原** 2003年ですが、日本で会社の仕事をきちんとするようになったのが2005年以後なので、まだ数年しか経っていないんです。

**池崎** 約3年の間で一番苦労なさったのは？

**小笠原** 「言葉」です。本当に「言葉」です。

最初は、本当に聞くだけでも疲れる、テレビなどを聞いているとすごくいいと聞いたんですけど、今年に入ってくらいかしら…。日本語のテレビを聞くことができるようになったのは。

**池崎** そうですか。では2年間は、日本語は仕事の時だけで…。

**小笠原** ええ、もういっぱいいっぱい…。毎日10～12時間会社に出ていますから。

**池崎** Japan Timesの会議は英語での会議ですか？

**小笠原** 日本語の方が多いですね。現場レベルのエディターズとかの部会は英語が多いですが。

**池崎** 2003年以前は、アメリカニフコで仕事をしていらっしゃったのですか？

**小笠原** いえいえ。全然。

**池崎** ではビジネスマネジメントとのご経験というのは？

**小笠原** 全然ないですよ。

**池崎** それだけでも大変ですね。日本語はもちろん大変かもしれないですけど、中身も重いものが…。

**小笠原** 本当にそれはいい勉強というか、こんな年齢になって新しいものを習う、学ばなければならないというのは、脳にいいなどすごく感じていて、それは感謝しています。(笑)

**池崎** 新しいことにチャレンジというわけですね。そうしようと決められたきっかけはなんですか？

**小笠原** チャレンジが大好きなんです。で、特に苦手なものをわざとやるということが割合好きなんです。何十年アメリカにい

て、日本にほとんど住んだことがない。でもいずれ、いつか、どこかで、日本というものをもう1回体験したい、もう一度自分の文化を学ばなくてはならない、と。言葉も英語しか使わなかったので、すっかり忘れてしまった部分があって…。

**池崎** 今、ご自分の文化という風におっしゃいましたけど日本の文化が自分の文化で、日本語が自分の言葉だという意識がおありになりますか？

**小笠原** もちろんアメリカにいた時はそう思っていました。部分的にはまだそう思います。でも日本に来て1年くらい経ってわかったのは、「私は100%日本人ではない」ということです。それこそ私は今のGlobal Citizenで、今の新しいHybridアメリカ人だなあという気がします。日本に来てそれをすごく実感というか、再確認できたというか。「ああ、そうか。私はもうこの文化から少し離れてしまったんだな」と考えることがあります。

## ビジネスでも 自己主張ができないのは…

**池崎** 何かそのきっかけになったお話がありますか？

**小笠原** きっかけですか…何か大きなものがあったというのではなく、小さいことですね。それを大きなカテゴリーで言えば、『考え方』です。例えば、女性のポジションとして人生をどういう風に考えるか、どういう期待、どういうことをやりたい、言いたい、周りにも受け入れられたいという気持ちが現在の日本ではちょっと違うな、という部分があって。

私は自分の発言をするというのが大好きなんです。

全く違うMFA(Master of Fine Arts)での経験の中ですが、アートの勉強ですごく基本的なものにCritiqueというのがあります。作

品を作るというのは、自分の考えで自分の発想で、自分が信じて自分で作る、そして自分で発表する、それだけなんです。Critiqueというのは、毎週自分の作品を授業、グループの前に持って行って、説明をし、見せて、意見・批判を聞く。これが美術の世界では普通のプロセスなんです。だから、私がビジネスの世界に入ってきて、「自分の主張ができない人がいる」ということにびっくりしました。大人なのになんでできないの？って。そういう違いがすごくあるなあと。自分から発言をしなければいけないというのは、私には「それをしなければ人生何なの？」というくらいです。

**池崎** ではもちろん、日本企業文化で意見を出せない・出さないことが普通だということに違和感がありますよね？

**小笠原** あります。

**池崎** そういう人たちが普通の日本人だとしたら、私は少し違う、意見はきっちり言っていかなければいけないし、言って当然だということですね。

**小笠原** そうなんですよ。そういうやり取りが欲しい。そうでないところか少し物足りないというか、そういう環境にいた方がもっと成長できると思うんです。

**池崎** 自分が意見を言って、違うなら違うと、そういう考え方が日本ではだめなんだよって思っているならそれを言って欲しい。そうしたら、じゃあこれはどうなの？って、それについてまた意見がほしい。そういったやり取りですよ。それができないということが日本人なのかな、と思われた？

## 日本語のLogicは難しい・・・

**小笠原** そう、まったくその通りです。

そしてもう一つすごく大きな違いだなあと。気がついたのが、「Logicが難しい」ということです。

**池崎** 例えばどのような？

**小笠原** 例えば…最初にso much frustratedなのは、アメリカから帰ってきて、国際免許を書き直しに行ったんです。今より日本語がわからなかったの、一つに自分の言葉もあるかと思うんですけど。何を言っていかなければならないかは事前に誰かに教えてもらっていたんですね。でもそこで持っていったもの以外に、アメリカの過去のドライバーライセンスを、つまり私はアメリカで18歳からずっと乗っていますから、その18歳の時からのドライバーライセンスを持ってきて下さいって言われたんです。

**池崎** 全部？！

**小笠原** そう全部。そんなのあり得ません。アメリカでは新しく更

新する時、返さないといけないので持っていないんですね。だから「それは無理です、これとこれは持ってきてくださいというのをちゃんと確認したはずなんですけど」って言って。でもそのおじさんわざわざ何回も「でもそれがないと…」という言い方をしていたんです。だから、「はっきり言ってください！最低限は何なんですか？何と何を言っていかなければいけないんですか？」と。

まあ、意地悪も半分入っていたと思いますけど、すごくFrustratingというか、答えがはっきり出ない、なんか曖昧なことを言って逃げているというようなことがあったので、それがもう印象的で「わからない…なんでもう少しクリアなルールがないのかな」と。

**池崎** 特にそういうOfficeの人であれば、「これとこれとがあれば大丈夫。でもあなたは今日これを持ってないから、次にこれを持ってきてください。」といえばクリアでFrustrationがないわけですね。そういう場面が日本では他にも結構あったのですか？

**小笠原** あります！役所みたいなどころとか、もっと日々あるのは、会議の中で何かの課題に対して「じゃあ問題はこれですか？」と聞こうとしても話が核心からそれて…。

**池崎** ポイントがわからなくなってしまう？

**小笠原** そう。結局は何か他にあったんだけど、言えなくて。

それをひとつずつ分析しないと分からない、そういうのがいつもあります。

**池崎** 今はもう少なくなりましたか？

**小笠原** 今もまだありますよ。だから私も通訳となるべく確認しながら進めていますが、わかったことは、私だけではなくて普通の人にもわかりにくいということです。

**池崎** 日本人にもわからないということですね。でもスタイルをしっかり持って、ポイントをはっきりしてくださいというメッセージを出していってほしいので、少しずつ減っていくのではないですか。そしてだんだんそういう会社になっていく。物事をクリアに、みんなで共有する、分けてもってやっていくということに…。

**小笠原** そうなんですよ。



## 日本の新聞も署名入りの自己主張 がもっとあってもいいのでは・・・

**池崎** では、3年経たれて、その間にビジネス日本語を勉強されて何が一番よかったですか？

**小笠原** やはりもっと理解していただきたい、自分のことを、自分が言っていることを、なるべく直接的に理解していただきたいというのがすごく大切ですよ。

**池崎** 熱いものをお持ちだから、それを自分の口で伝えたい、ということですね。

**小笠原** そうです。それがまだまだ足りなくて大変なんですよ。日本語も日本文化も難しいですよ。

**池崎** 日本語は曖昧な言語だとよく言われますけど、私はそうじゃないと思うんですね。日本語は非常にクリアだと思います。ただ使い方の問題であって。

**小笠原** 使い方は曖昧なものありますよね～。

**池崎** そう、ですから、どういう風に使うかだと思うんですね。日本語をどう組み立てて、どうコミュニケーションを取っていくか、そのやり方があまりにストレートではないところに難しさがあると思うんですが。

**小笠原** 使い手、使い方ですよ。でも例えばJapan Timesは新聞社ですが、日本の新聞記事などはポイントがはっきりしていないことが多いとよく伺いますね。

ですから、反対にJapan Timesは、記者をトレーニングするときには西洋のスタンダードで、特に書く文章についてはものすごくはっきりしていなければいけない、ということがあります。

私も全部アメリカの教育なのでそうなんです、性格は割合Japaneseなので、こんな書き方が好き、という部分があったんですよ。

でも、何年ものトレーニングで「何を言いたいんだ、何がポイントなんだ、もっとはっきり言え、もっとシンプルに言え」という訓練を繰り返して、で、それがどんなにいい文章かということがわかったというか、大好きなんですよ。記事もそうです。書き方というのがてきばき決まっていて、英語の記事ではFirst paragraphで大体全部わからなければいけない。

**池崎** 特に見出しでわからなくてはいけないと言いますよね。

**小笠原** 日本の新聞記事というのはそういうのがあまりないと聞いています。読んでいても「で、結局何？」というのが多い。

**池崎** 日本の記事の場合は特に。最近は少しずつ、署名記事というかその欄を書いた人の名前を書くようになりましたね。以前は誰がこの記事を書いたのか、デスク全体を通してそれをまとめているか、全然わからなかったんですね。今は、部分的にですが署名入りになり、書いた人の名前がきちんと出る、ということで、その人が何を言いたかったのかということがわかるようになったのではないかなと思います。それはとてもいい傾向ですよ。日本の新聞も少しずつ…

**小笠原** 変わっていつてますからね。

**池崎** 時々「見出し」にただはっと目を引くような単語を並べてあるのに、言っていることは「何かそうなりそうだ。」みたいな内容があって、そういう書き方はよくないと思うんですよ。やはり新聞というのは事実をきちんと伝えていくことが大切ですよ。

**小笠原** そうなんです。だからこっちに来てびっくりしましたよ。

**池崎** 今日のご経験をふまえた貴重なお話を大変ありがとうございました。